

幻の首都遷都計画生きた昭和史として甦る

石原 常雄

はじめに

第二次世界大戦中の昭和十八年、日本政府は極秘裏に「首都遷都計画案」の作成を進めていた。これは現在の「首都機能分散計画」とは、その性格・内容において、全く異なるものである。

この遷都計画は、日本の敗戦と共に幻に終わり、歴史上から消滅してしまった。しかしその後、昭和五十二年に至って、当時の極秘文書が西日本新聞社の記者により、ついに発見され紹介された(同年十月六日)。これにより初めて、邑久郡行幸村(現長船町)を中心とした地域一帯一吉井川流域一が、昭和史の大舞台であったことが判明した。

すでに、地方の時代、地域活性化の時代と言われて久しい。この「首都遷都計画」なるものの内容と根拠をさぐれば、地域史研究はもちろん地域の活性化に格好の材料を提供するのではないか。以下その概要を紹介する。

首都遷都計画案の概要

この計画案は昭和十八年十月、当時の企画院第一部第三課において作成された。戦時下のわが国の政治・経済・文化等の基盤となる、国土の効率的な利用・開発・保全に関する方面を明らかにした「中央計画素案」の一部である。以下その主要部分を摘記する。(原文のまま)

首都に関する部分

- 一、大東亜共栄圏の枢軸としてこれが建設、指導及び防衛の重大使命を有する皇国の首都は、この責務を完遂するに最も適当なる地域にこれを定むべきものとす。
- 二、首都は概ね左の条件に適應せる土地にこれを定むべきものとす。
 - ①八紘一宇の理想を顕現するに最も適当なる全国の中心たるべき土地。
 - ②地震及び風水害等の天災地変の少なき土地。
 - ③四季の判別なると共に、冬季寒気厳しからず、夏期暑気甚だしからざる土地。
 - ④地形平潤にして高燥、風光明眉なる土地。
 - ⑤用水、電力、食糧その他諸物資豊富なる土地。
 - ⑥交通便利にして、地域の文化高く、而も既成都市と適当に離れたる土地。
- 三、首都の建設に当りては特に防空、耐火、耐震及び、美術上の見地において最も完全なる都市造成に、重点を指向するものとす。
- 四、首都は皇居の他、概ね左の要素を以てこれを構成することとし、極力不要なる機能の集中を抑制するものとす。
 - ①政府各官衙。
 - ②各種統制機関。
 - ③(①②)の要員及び家族。
 - ④生活必需物資配給機関の要員及び家族。
 - ⑤外交機関及び要員、家族。

⑥外国の公館及び要員、家族。

⑦その他医院、娯楽機関、銀行、国民学校等及び要員家族。

五、左の地区を首都と定むべき候補地とする。

①岡山県邑久郡行幸村中心地区。

②福岡県八女郡福島町中心地区。

③朝鮮京畿道城府周辺地区。

(以下省略)

以上が昭和十八年に作成された「首都遷都計画案」の基本計画の概要である。邑久郡行幸村中心地区－吉井川流域－が首都移転の第一候補地にあげられていたとは、大きな驚きである。

行幸村中心地区を第一候補地に推した人々

昭和十二年(一九三七)第一次近衛内閣当時、内閣調査局と資源局を合併して、新たに企画院が創設された。この機関は、各省に散在していた、経済関係の革新官僚を集めて「国力充実四カ年計画」を作り、経済力の強力な国家統制の実現に重要な役割を果たした。

本項では当時、企画院において活躍した岡山県出身の俊秀の四氏について、経歴・政策・政見等について取り上げる。その四氏とは、黒正巖・亀山孝一・和田博雄・岡崎勉である。

黒正巖 経済学博士。上道郡可知村(現岡山市西大寺区)出身。京都大学卒。第六高等学校長、ついで岡山大学教授。昭和十五年より企画院委員となり、当時の「軍部主導型国土計画」に対して、正しい地理的、歴史的認識に立った「国土構想論」を展開した。

亀山孝一 政治家。御津郡今村(現岡山市今)出身。東大卒。戦後代議士六期。昭和十三年内務省に入り、後に企画院第三部長となる。第三部は人的総動員計画の総元締である。彼は温厚な人柄から軍部の信頼を得て、その施策に影響を与えた。学者の黒正とは対照的であったが、ともに「首都遷都計画案」について、郷土のため大きく貢献した。

和田博雄 政治家。埼玉県川越市出身、岡山在住。東大卒。昭和十年内閣調査局長を経て企画院調査官に就任。彼の「経済統制理論」が国家社会主義として一時問題になったが(企画院事件)、戦後彼は農林大臣、経済安定本部長官を歴任した。調査官時代、広い視野から地城(郷土)を観察・調査し、地域の特徴に即した地方行政施策の確立に努めた。

岡崎勉 政治家。西大寺射越出身。岡山師範卒。岡山県視学、西大寺市長、全国町村会長を歴任。昭和十五年大政翼賛会の初代総務に就任。企画院委員として、地方行政、農林経済施策の実施に貢献した。

以上の四氏は立場こそ異なるが、そろって郷土の発展を念頭において活躍した。邑久郡行幸村中心地域－吉井川流域－の特長をよく把握し、それが首都の条件・要素をくまなく具備することを洞察・認識し、強調したのであった。

遷都第一候補地行幸村中心地域の特長 ーその風土、歴史、伝授ー

吉井川流域一帯は、気候風土はもとより、地形、景観に加え、すばらしい歴史と伝統を有する。先の岡山県の四氏は、その地理、風土、歴史等に関して何に着目し、それをどのように要路

に提示紹介したのであろうか。

もちろん「首都遷都計画案」なるものが、その必須条件・要素とする諸項目(前述)をくまなく押さえ、吉井川流域が第一候補地としてそれらをすべて備えていることを証明し提示したのであった。以下その主要なものについて述べてみよう。

第一 気候風土について

行幸村を中心とした吉井川流域—東備前全地域—の地は温和な瀬戸内式気候の典型地であり、備前米でその名を知られた穀倉地帯である。南は変化に富んだ美しい海岸がつづき、北は吉備高原の峰々が並び、中間は熊山山塊がぎ然とした姿で立っている。吉井川はその中を北から南に流れる大河で、いわば穀倉地帯の血脈である。

第二 大災害を知らぬ安全地帯

瀬戸内地方は古来少雨で有名であるが、同時に大災害を知らぬ地域である。時に襲ってくる台風も、新田開発のため造成された田原用水や倉安川その他多くの用水施設が緩衝機能を発揮して害は少なく、むしろ肥土をもたらす働きさえしている。吉井川流域はまさに桃源郷の名にふさわしいと言ってよい。

第三 全国を制覇した備前力

日本歴史の上で、吉井川流域—東備前全地域—が全国的に群を抜いて名をなしたものは刀剣産業である。それは質・量両面にわたってそうであり、外国人にとっては備前刀は日本刀の別名でさえある。

備前刀の中心が福岡と長船に指を屈すべきは今さら言をまたないが、日本人の精神を最も象徴する刀剣の宝庫が、吉井川流域であることを忘れるわけにはいかない。因みに国の重要文化財指定刀の九割は備前刀である。

第四 明禅寺合戦の歴史的意味

現在の岡山城の基をつくったのは宇喜多直家である。直家が岡山城へ入る少し前、明禅寺合戦で備中の三村勢を大破したことはよく知られている。

しかし、この合戦が、三村勢二万に対して宇喜多勢はわずか五千であった上に、鉄砲を組織的、計画的に使って、鉄砲の威力を日本戦史上初めて証明した戦いであったことは余り知られていない。

鉄砲の威力を明らかにしたのは、これまで長篠の戦い(織田・徳川軍対武田勝頼軍の戦い〈天正三年〉)とされてきた。しかし明禅寺合戦では長篠の戦いの八年前のことであり、鉄砲使用については断然「先師」の立場にあるのである。

宇喜多直家の本拠は東備前にあった。なかんずく邑久郡の福岡付近(旧行幸村)であった。明禅寺合戦の時の宇喜多の本陣は沼城であったけれども、策源地は東備前の「都市」福岡であった。ここが新兵器の調達地であり、新戦術の創造地であった。

織田信長の天下統一への動因が組織的な鉄砲使用にあったとすれば、直家こそ東備前の新知見・英知の信長—天下人—への提供者ということになる。。

第五 河川交通「高瀬舟」の原点吉井川

近世の大事業家角倉了以が、吉井川の高瀬舟を模範として淀川・天竜川・富士川・高瀬川の舟

運を開いたことは有名である。彼は急流吉井川の舟運の姿を見て「百川以て船を通ずべし」と感歎し、自らの事業に採用したという。備前刀の産業としての成立は吉井川の舟運を外しては考えられないが、角倉をして歎ぜしめた吉井川人の器量と新機軸は備前刀の輝きに匹敵し、今改めて記憶にとどめておくべきことがらと思う。

第六 儒教精神の拠点「閑谷黌」

江戸時代、備前の学問の府は岡山の藩校と和気郡の閑谷黌であったが、広義の教育の面では藩校は閑谷黌の足元にも及ばなかった。

閑谷黌は池田光政の命をうけて、津田永忠が命をかけて造営した教育施設である。多くの古井川流域の人士によって支えられ、江戸後期には天下に名をはせた。

特に、明治維新を準備した尊王思想家たち(多くは陽明学者)が来訪し、肝胆相照らして帰って行った。菅茶山、高山彦九郎、大塩平八郎(中斎)、頼山陽らである。陽明学者熊沢蕃山の影響は江戸末もなお生きており、当時維新の胎動は日々高まっていた。江戸終わりには閑谷黌は異色の学校であった。因みに、和気清麻呂が高潔・信念の人として見直されたのはこうした雰囲気からであった。

遷都第一候補地の将来の展望—東備前の歴史の発展の方向—

遷都第一の特長として、風土・歴史・伝統の中から前記の七つをあげた。行幸村(現長船町)を中心とした地域が遷都の第一候補にあげられたとき、条件・要素として注目されたに違いないことがらを概略述べたのである。

遷都計画は結局幻に終わったにしても、注目された条件・要素は歴史的事実であり、また貴重な地域の個性であり、没却できぬ価値である。今後の東備前の歴史の発展方向は、ここに出発点があり、また同時に向かうべき目標がある。

かつて我々の先祖が地域条件をフルに生かしてかちえた光栄を、今後この東備前において新しい姿でどう再生させるか、これこそが今問われている歴史課題である。経済の面、社会生活の面、文化・教育の面等において、我らの先祖は貴重な導きの星をすでに用意してくれている。ただ二十一世紀という時代に、それをいかに創造的に変形活用するかである。

おわりに

生きた昭和史、第二次大戦中の「首都遷都計画案」は、ただ邑久郡行幸村付近のみの出来事ではない。少なくとも岡山県全域規模以上に影響を及ぼすほどの内容である。

現在進められている、東京過密、一極集中是正のための「首都機能分散計画」も、その地域決定の第一次発表の真近に迫ったことを新聞は報道しているが、今こそ、かつての「首都遷都計画案」の歴史的状況と意味の、本格的研究に取り組む好機の到来と考える。

(住所 〒701-4265 邑久郡長船町福岡八五二・一)

参考文献

昭和十八年十月 「中央計画素案要綱案」企画院第一部第三課

藤原大八ほか先学諸氏の教示による。